

文化人類学 Anthropology

安井眞奈美

キーワード…異文化研究、ネイティブの人類学、民俗学、民族誌・民俗誌、東日本大震災、災害、ジェンダー、人類学の静かな革命、軍隊、文化の三角測量

一 異文化から日本を捉える視点

筆者に与えられた課題は、近年の文化人類学における日本研究の動向を示すことである。しかし、これは容易ではない。なぜなら異文化研究を行ってきた文化人類学において、主に日本研究を進める日本の文化人類学者はきわめて少ないからである。

もちろん、異文化としての日本を対象とした、海外の文化人類学者による数多くの研究を挙げることもできる。しかし本稿では、少数であっても日本語で書かれたものを紹介したい。桑山敬己が『ネイティブの人類学と民俗学——知の世界システムと日本』（弘文堂、二〇〇八、*Native Anthropology: The Japanese Challenge to Western Academic Hegemony*,

Melbourne: Trans Pacific Press, 2004の日本語版）にて指摘したように、二〇〇四年四月、日本民族学会は日本文化人類学会と改称したが、この学会は二千人を超える研究者を擁し、文化人類学または社会人類学の分野では世界屈指の規模を誇っている。しかし、その活動は国外ではほとんど知られておらず、海外の日本研究者にはその存在さえ知らない者がいる（ii頁）という状況にあるからだ。また「対照的に、アメリカの学者の大部分は日本研究の専門家を含めて、日本人の業績にほとんど無知でも許される状況にある。それがどんなに重要な研究であっても、である」（iv頁）という。こうした学問における「不平等」がどのようにして生まれたのか、桑山は先述の著作において分析を試みている。このような「不平等」は現在も続いていると考えられるため、本稿では日本語で書かれた日本研究を

紹介することによって、現状の改善に少しでも役立てればと願う。

これまで日本の文化人類学者が、日本について言及してこなかったわけでは決してない。海外で長期のフィールドワークを行い、異文化に関する研究成果を発表すると同時に、それらの知見をもとに、改めて日本を外から眺め、積極的に発言を続けてきた研究者もいる。また、文化人類学の参与観察の方法論を取り入れ、日本の社会を対象にフィールドワークを行ってきた研究者もいる。これらの研究には、単なる日本文化論にとどまらない、深みと広がりがあった。

たとえば山口昌男は、人類学の王権論から文化装置としての天皇制を検討し(『天皇制の文化人類学』立風書房、一九八九)、また日本の近現代についても精力的に論じてきた(『挫折』の昭和史)岩波書店、一九九五、『敗者』の精神史)岩波書店、一九九五)。また米山俊直なおは、祇園祭、天神祭など日本の代表的な都市の祭りをフィールドワークの成果から明らかにし(『祇園祭——都市人類学ことはじめ』中公新書、一九七四、『天神祭——大阪の祭礼』中公新書、一九七九)、日本の社会、文化を独自の視点からまとめた(『小盆地宇宙と日本文化』岩波書店、一九八九、『日本』とはなにか——文明の時間と文化の時間)人文書館、二〇〇七)。川田順造かわだじゆんぞうは、アフリカ、フランス、そして日本の比較研究を、豊富な知識とフィールドワークの成果から実践し、「文化の三角測量」という方法論を確立した(『文化の三角測量——川田順造講演集』人文書院、二〇〇八)。川田は、後述するよ

うに、現代日本について文化人類学者の立場から積極的に発言を続けている(『日本を問い直す——人類学者の視座』青土社、二〇一〇)。

しかし、文化人類学が大学の制度の中で新たな講座として成立し定着していった中で、異文化のフィールドワークとデータの収集、そこから論文を作成する教育課程はあっても、その知見をもとに最終的に自文化である日本を論じることはあまり重視されなかった。また膨大な資料を蓄積してきた民俗学や、現代社会を鮮やかな手法で切り込み、新たな視角を浮かび上がらせる社会学などの近隣諸学問に対して、文化人類学における日本研究の独自性を積極的に打ち出そうとはしてこなかったと言える。

こうした状況にあつて、文化人類学における日本研究を紹介することは、数も少ないために、難しいと言わざるを得ないが、著者の独断でいくつかを選び、今後の展開も視野に入れて紹介していくことにする。

二 文化人類学の新たなパースペクティヴ

「未開」から、身近な他者の研究へ

かつて人類学者は、「未開」と呼ばれる場所に出かけてその地域の文化を総合的に記述するという独自の方法論で研究を進めてきた。

しかし、文化人類学の「異文化研究」そのものが、いまや大きく様変わりをしている。

そのことを端的に示しているのが、田中雅一編『軍隊の文化人類学』（風響社、二〇一五）である。田中は、序章「軍隊の文化人類学のために」の中で、人類学の対象が、地域的な周縁性、つまり「未開」（ヨーロッパ社会を中心とする世界の周辺）や「田舎」（都市を中心とする国家の周辺）から、都市に住む「他者」へと移ってきた歴史の中で、近年では地域や生業によって他者とされる存在ではなく、よりアイデンティティに関わる、主観によって規定される他者に移りつつあることを指摘する。そして最近の傾向として、同性愛やトランスジェンダー、摂食障害などが研究対象となつていることを挙げ、身近な他者、他者とも言えない他者を取り挙げられていることを示している（四頁）。

田中は、人類学が歴史的にたどつてきた、周辺に位置する他者を探し求める過程にある、植民地主義的態度を批判的に乗り越えるために、他者ではあるが弱者ではない、また弱者とは捉えにくい存在を研究対象にするという方法を提案する。つまり、文化的に影響力があるエリートたち、政治的または経済的に力を有する「他者」の研究である。田中が選んだ対象は、軍隊であった。軍隊を研究することは、それが国家に直属するという意味において、文化人類学的な視点からの国家研究にもなるという。

本書は、軍隊を多角的に考察するために、第一部「軍隊とジェンダー・家族」、第二部「軍隊と地域社会」、第三部「軍隊と国家」、第四部「軍隊の表象のポリテクス」という構成をとり、各部には三〜五本の論文が所収されている。たとえば冒頭の論文「モダン・ガール（モガ）」としての女性兵士たち——自衛隊のうちとそと」（サビーネ・フリーシュトゥック、萩原卓也訳）では、全自衛官の約5%を占める女性自衛官へのインタビューから、彼女たちが自身の経験をどのように位置づけているのかが描かれる。また同時に、自衛隊が募集活動や広報活動などの視覚イメージにおいて、いかに女性を利用していいのかも明らかにされる。ジェンダー論として読み応えのある論考であり、またあまり一般の人々には知られない軍隊（ここでは自衛隊）に属する人々の身体性、日常そのものが描き出されている。また、田中雅一の論考「軍隊・性暴力・売春——復帰前後の沖縄を中心に」は、現代にも続く米兵による性暴力が根絶にほど遠い中で、その構造的な暴力の歴史を理解する上でも重要になってくるであろう。

軍事産業と国の軍事力がきわめて重要視される現代世界の中で、改めて日本の立ち位置が問われるようになってきたが、本書は、主としてアジアの軍隊の実状を、文化人類学的視点から多角的にとらえた好著と言える。

現実を批判する姿勢

次に春日直樹編『現実批判の人類学——新世代のエスノグラフィへ』（世界思想社、二〇一一）を挙げたい。春日は、八〇年代のポストモダン人類学やその流れを汲んだ九〇年代のポストコロニアル人類学を経て、その中でじっくりと熟成し、いまや大きな運動として姿を現してきた「人類学の静かな革命」に注目する。

「人類学の静かな革命」とは何か。春日によると「存在論的転換」、つまり、人間と主体に対する徹底して関係論的な認識であるという。「徹底して」という言葉があたり冠されているのは、「人間以外のモノや人工物を同等な要素として組み入れる点で、さらに実在はこれらとの関係においてのみ成り立つと主張する点で、ゆえにリアリティとは関係の生成変化に等しいとする点において、ふさわしい言葉だからだ」とされる（一四頁）。

ではどのようにして批判が可能なのか。本書の論考は、どれも一見批判にはみえない論述をとっている。むしろ、分析者がどのように関係の一部として参与しているかに重点が置かれている。春日の言葉を借りれば、「何がアクターとして活性化し、他のどのようなアクターとつながるのか。あるいは全体をもたない部分が別の全体をもたない部分へとどうリンクしていくか。そうしたちよつとした細部の変化から、ありえたかもしれないつながりや生成可能かもしれない現実を喚起することが、本書の批判的性格において中核をな

している」という（二二頁）。

本書は十三章からなり、山崎吾郎の「脳死の経験とその正当性」（第六章）、モハーチ・ゲルゲイの「病気の通約——血糖自己測定の実践における現実としての批判」（第九章）、市野澤潤平「性転換」という迷路——「性同一性障害（者）」における性自認をめぐる欲望と現実」などが、日本の事例を中心に扱っている。なかでも猪瀬浩平の「監査される事件、監査されざる場所——ある盗難事件をめぐる〈静かな革命〉へのパースペクティブ」（第七章）は、著者の周りで起きた事件を素材にしている興味深い。この事件は、見沼田んぼ福祉農園という、県民参加で遊休農地を有効に活用できる場で起きた盗難事件であり、著者である猪瀬もその解決に向けて奔走、その過程が詳細に記述される。著者は、行政職員の対応のまずさに、「行政職員としての正しい振る舞いや説明責任を求める」行動を起すが、自らの行為もまた監査文化を再生産しているのに他ならない、と気づく。監査文化（audit cultures）、つまり組織や個人が自らの活動について、評価や認定を行い、不特定多数の人々に対して納得してもらえよう情報開示することが、もはや断罪すべき対象ではなくなり、わたしたち自身もまた監査文化を構成するものの一部をなしてしまっている、その事態を明らかにする（二六二―二六三頁）。では、もはや私たちは監査文化から抜け出すことが不可能なのだろうか。否、著者は、盗難事件以前には存在しなかった関係性

と、そこから生まれる日常実践に注目する。そのところが「静かな革命」の契機である、というわけだ。大きな革命を起こさずとも、日常生活への私たちの関わりの変化が、新しい事態を生み出すのである。

三 フィールドワークに基づく人間の理解にむけて

文化の三角測量

川田順造は、先述した通り、現代日本について積極的に発言を続けている稀有な文化人類学者の一人である。彼はフランスで民族学・文化人類学を修め、西アフリカで長年フィールドワークに基づく研究を行ってきた。本論の目的からすると、川田順造の多数の著作からは、たとえば『日本を問い直す——人類学者の視座』（青土社、二〇一〇）を挙げるのがふさわしいのかもしれない。しかしここは、あえて一般向けに書かれた岩波新書の『運ぶヒト』の人類学（二〇一四）を紹介したい。本書には、フランス、アフリカ、日本の三つの文化に基づく分析と思索である「文化の三角測量」が明確に打ち出されているからである。

川田によると、文化の比較には大きく二つの方法がある。まずは歴史上関係があつたことが明らかな文化を比較する方法で、たとえ

ば日本列島と中国大陸や朝鮮半島の文化の比較が挙げられる。もう一つは、地理的にも文化的にも著しくへだたり、相互に直接の影響関係がまったく、あるいはほとんどなかったような三つの文化を比較する方法である。後者の方法に、地測の三角測量の考え方を借用し、川田は「文化の三角測量」と名付けた（二三頁）。前者を「歴史的」比較と呼ぶなら、後者は「論理的」「発見的」比較といえる。この方法には、まったく異なって見える三つの文化を、あえて比較してみることで、一つの文化だけを見ていたのでは気づかなかつた隠れた意味を発見することができるという利点がある。レヴィ＝ストロースとも親交が深かつた川田順造は、構造主義の特徴である隠れた意味や構造をも探ろうとしたのだろう。

本書では、モノを運ぶという生活の基本的な動作に着目し、道具とそれを使う人間の関係を、「文化の三角測量」の視点から分析する。そして、西アフリカ・モシ族の文化に見出される指向性を「人間の道具化」、日本文化を「道具の人間化」、フランス文化をふくむ西欧文化を「道具の脱人間化」として性格づけている。西アフリカ内陸の黒人は、運搬具といえるようなものをほとんど必要としないくらい頭上運搬が発達、普及しており、人体を道具として用いていると言える。骨盤が前傾した体幹で、荷の重心を垂直に支える頭上運搬が極めて合理的なためである。

これに対して西欧文化における運搬具は、機能の特化した物的装

置を用いて、運搬を確実に容易にする指向性があるという。これは人間の巧みさに依存せず、誰がやつても同じように良い結果が得られるように道具を工夫することであり、「道具の脱人間化」と呼ぶ。日本では、人体への着脱が自在・容易で、物的装置として単純な道具を、使う人間の「巧みさ」で上手に使いこなすという指向性を持ち、ヨーロッパとは対照をなすと言える。また運搬具だけではなく、人間の行動の基本的指向として「目的指向」と「過程尊重」という価値観を対比することも可能だとする。さらに女性の自己主張の強さという点においても、著者は三角測量による分析を展開している。

このように、三つの文化に生涯をかけて関わってきた著者の研究からは、人間を幅広く理解しようとする文化人類学のおもしろさが伝わってくるのである。

民族誌・民俗誌を作成する

文化人類学者の仕事の一つに、ある地域を対象にしてその社会や文化を総合的に描き出す、エスノグラフィ（民族誌）の作成が挙げられる。世界各地の民族誌をいくつも集めて分析することにより、人間とは何かという、より抽象度の高い議論を展開することができ。そのような民族誌を作成するには、地域の人々と長年にわたる信頼関係を築きながら、調査を進め記録していくという膨大な時間

と労力が必要になってくる。同様の作業は、日本の社会を対象とした民俗学者の作成する民俗誌にもみとれる。そのような民族誌・民俗誌のなかから、本稿では、海外のフィールドワークの経験と、理論的な枠組みを用いて日本の民俗社会の分析を進めてきた、小松和彦の『いざなぎ流の研究——歴史のなかのいざなぎ流太夫』（角川学芸出版、二〇一一）を紹介したい。

本書について著者は、姉妹編として刊行予定の『いざなぎ流の研究——いざなぎ流祭文と祭儀（仮題）』とあわせて、「二冊の本とありあえず世に送り出すことで、自分が文化人類学者であり民俗学者であるという証しを、ようやく示すことができるのだと思っている」（V頁）と明記している。

さらに著者により本書が、通常の「民俗誌」の枠を大幅に超えた「いざなぎ流の歴史民俗誌的研究」と特徴づけられているのは、とりわけ後半部分が、まるで謎解きをするかのように展開していくからである。「いざなぎ流」とは、高知県の山間地域である榎山に伝承されてきた民間信仰であり、「太夫」と呼ばれる地元在住の宗教者たちが独自の祭祀を担ってきた。いざなぎ流の知識や祭祀は、その全体像が不明とされてきたが、著者はその源流は近世にも中世にも遡れるかもしれない、それを明らかにするために、いざなぎ流太夫の先祖である近世の神主や、「博士」や「陰陽師」として把握されてきた宗教者たちの実態に迫ろうとする。しかし、そうは簡単に進

まない。いざなぎ流太夫の数は減少し、関連の文書は限られているところだが、四十年にわたる調査の中で、まるで発見してくれることを待っていたかのように、著者の前に、期待をはるかに超える資料が現れてくるのである。新資料の発見は、偶然というよりはむしろ必然にも思えてくる。

その新資料とは、近世における、横山の土御門家支配の陰陽師や陰陽師と神主の関係などの様子を描いた関係文書であった（第六章）。著者はこの文書をもとに分析を行うのだが、家系図の矛盾や不備などについては、なぜそのような矛盾が生じたのかを考察し、文書のない部分については推論を重ねていく。それらを経て明らかにされる陰陽師は、たいした努力もせずに陰陽師になれた、陰陽師株を入手しさえすればなれた、という一面も明らかにされる（三八七頁）。つまり、この地域の宗教者たちはこの地域の伝承的信仰知識を温存し活用するために、「神主」になったり、「博士」になったり、「陰陽師」になったり、「修験」になったりという。彼らが、きわめて柔軟な形で、時代に対応しながら信仰知識を守ってきたことが窺い知れる。

一方、明治維新の宗教政策に対しては、太夫たちは国家公認の神道系教団「神道修成派」に入門し、これを隠れ蓑にする形で生き延びてきた。そして著者は、「いざなぎ流」という名称も、神道修成派に属したことによって生み出されたのではないか、と論じている。

このように、ほとんど「闇」であつたいざなぎ流の信仰と人々の生活が、本書によって鮮明に描きだされたことは、「研究上の大きな前進」である。著者は「あとがき」で、関連の新資料があと数点あれば「もう少し妄想をセーブできたはずだと思う」と述べているが、本書は、読者の知的好奇心を刺激し謎解きの世界へと誘いながら、研究上の大きな前進を果たした稀有な民俗誌と言えるだろう。

四 東日本大震災以降の日本研究

二〇一一年三月十一日に起こった東日本大震災と、それに続く福島原発事故がもたらした惨事は計り知れない。被災した人々のために、また地域の復興にむけて少しでも役に立ちたいと、多くの研究者がボランティアに訪れ、そして新たな研究を開始した。震災の実態、被災した人々の生活の実態を目の当たりにする中で、それらを忠実に伝えたり、地域の再建について考えたり、また今後起こりうる災害への対処を考えたりする多くの論文が生みだされ、すでにひとつの研究分野を成しつつある。

アフリカを専門とする文化人類学者の権野若菜が監修するシリーズ「FENICS (Fieldworker's Experimental Network for Interdisciplinary Communications)」一〇〇万人のフィールドワーカー」第五巻は、木村

周平・杉戸信彦・柄谷友香編集による『災害フィールドワーク論』（古今書院、二〇一四）である。文化人類学における震災の研究は、都市工学や防災学などのようにすぐに役立つものではない。木村が指摘するように、「文化人類学的な手法から理論構築への貢献や、諸現場への「実装」は難しいかもしれない。しかし、文化人類学的な調査にもとづく現場の詳細な記述は、災害の現場にかかわる（あるいは本人の意図とはかわりなく巻き込まれてしまっている）人びとが、いざ、自分で問題に対応しようとする時に、ヒントを与えてくれる」（木村周平「日常から見える「防災」——イスタンブルでの文化人類学的参与観察 五六頁）という。木村は、震災を研究テーマにトルコで実施した調査を経て、東日本大震災の被災地での調査にも取り組んでいる。「やはり今回も、何かが「見えてくる」までにかかりの時間がかかるだろう。それを逆手にとり、人びとの不安や希望や苛立ちにじっくりと付き合っていくというのが、文化人類学者の態度であろう」という立場をとる（五七頁）。時間をかけたフィールドワークから可能になる詳細な記述と、人びととのつきあいの中に、防災も含めた暮らしのヒントがあるというわけである。

ここで、文化人類学に留まらず、民俗学の震災に関する研究もあえて紹介したい。なぜなら民俗学の一連の研究には、東日本大震災以前からの地域の詳細な民俗誌と、これまでの地震・津波への人々の対処といった、長期的な視野からの研究成果が見られるからであ

る。たとえば民俗学者・川島秀一は『海と生きる作法——漁師から学ぶ災害観』（富山房インターナショナル、二〇一七）で、長年にわたって三陸海岸を歩き聞き取った、漁労をめぐる生活を書き記している。東日本大震災で自らも被災した川島は、震災後、石井正巳とともに、山口弥一郎の『津波と村』（恒春閣書房、一九四三）を編集・復刊している（石井正巳・川島秀一編、三弥井書店、二〇一一）。福島県会津地方出身の地理学者であり民俗学者でもある山口弥一郎は、一九三三（昭和八）年の三陸大津波の後、被災地を歩き、被災の状況と復興の様子を記録し、一九四三年に『津波と村』として刊行した。川島は、三陸沿岸を「津波常習地」と名付けた山口の『津波と村』を読み直し、東日本大震災による津波からの復興を捉え直そうとする。「津波常襲地」ではなく「津波常習地」という、「慣れる」という言葉にも通じる「習う」に、津波とともに生活し、災害に対して積極的に向き合ってきたという意味を見出している。

川島の『海と生きる作法』によると、自然災害への対応のしかたは、同じ三陸沿岸の集落であつても一様ではない。たとえば、本家・分家関係を色濃く残していた集落、契約講などのような講集団が意思決定を行っていたような集落、さらにはかつての漁労集団が震災時に、蘇ったように団結して対応にあたった集落など（五七一―五八頁）。「集落において人々の結ばれ方がどのようなものであるかによつて復興の道筋も自ずから違つて現れてくる」（五八頁）とい

う指摘は、復興の在り方を考える上できわめて重要な点であり、また、長年にわたる調査成果に基づいているからこそ、浮かび上がったくなる視点と言えるだろう。

それにしても、川島が本書の裏表紙カバーで用いている巨大な防波堤の写真には、さまざまなことを考えさせられる。防災のために海岸沿いにそびえる防波堤には、海が覗けるように小さな小窓が設置されている。川島は、海が見える場所に人々が古いソファアなどを置いて、集まって来ては何となく海を見て話をする、そんな場所に注目する。そして、「一見すると何も意味がないような場所と見えるが、ここからしか海と人間との関わりは出発できない。それは、防波堤に小窓を切りぬいて海を見せるような、生活感情を無視した幼稚な発想とは対極にある場所である」（二八七頁）と指摘している。

もう一冊、地震に関連させて紹介したいのが、オランダの構造主義人類学者コルネリウス・アウエハントの『鯨絵』(C. Ouweland, *Namazu-e and Their Themes: An Interpretive Approach to Some Aspects of Japanese Folk Religion*, Leiden: Brill, 1964)である。安政二年(一八五五)一〇月二日、大都市・江戸に起こった大地震をきっかけに、大量に出回った「鯨絵」と称する多色摺の民俗絵画の図像的な分析研究である。一九七九年に小松和彦・中沢新一・飯島吉晴・古家信平の翻訳により、『鯨絵——民俗的想像力の世界』として出版され、一九八六年には普及版も刊行された(せりか書房)。民俗学者の宮田登は、「外

国人による日本研究の優れた到達点を明示したものであることは大方の認めるところであろう」と優れた評価を与えている(普及版「解説」五六二頁)。二〇一三年には岩波文庫版が出され、その解説を翻訳者の一人・中沢新一が執筆している。

中沢は、人類学者のレイヴィストロースが、北米北西海岸に住む先住民部族の伝える地震をテーマにした神話と、アウエハントの『鯨絵』で分析されている、日本人が大震災のあとに生み出した鯨絵に表現されている観念との間に、驚くべき並行関係が見いだされた点に注目している。そして、「揺れ動く大地」であるプレート上に生活を営んだ人間は、地理的に遠く離れていても、文化的伝統が違っていても、神話的思考においてはほとんど同一の論理をたどって、それぞれの表現を生み出したのである。構造論を駆使すればこのような比較の範囲は、さらに拡大していくことができる(一六〇〇—一六〇一頁)と指摘する。地震をめぐる神話的思考の環をあきらかにするとう、文化人類学ならではのスケールの大きな研究が実現されれば、人間の思考を理解するための重要な研究成果が提示されるはずである。こうした点に、文化人類学のもっていた研究の深みとおもしろさがあるように思う。

最後に

筆者がこの課題を依頼されたのは、筆者の研究テーマのひとつが、妊娠や出産、産後に関する民俗学および文化人類学的な研究であったからだと推測する。そこで最後に、この分野の研究の状況と筆者の課題を述べて本論を閉じることにした。

世界各地における近代化の中で、妊娠・出産・産後がどのように変容し、また医療の対象となってきたか、これまでの文化人類学の研究成果が示すように、その過程はさまざまである。医療のおかげで従来では救えなかった母子の命が助かるようになったことは事実であるが、一方で、医療の過剰な介入によって新たな問題が生じている地域もある。こうした現状を明らかにするためには、各地の詳細な民族誌的報告が引き続き必要となる。

では、少子高齢化の進む日本において、妊娠・出産・産後はどのように位置づけられるのだろうか。その点については松岡悦子が、『妊娠と出産の人類学——リプロダクションを問い直す』（世界思想社、二〇一四）にて、世界各地の事例の中で日本の現状を分析している。また筆者は、現代の日本の出産および育児の現状を明らかにするために、研究仲間とともに『出産の民俗学・文化人類学』（勉誠出版、二〇一三）をまとめた。現状を把握するためには、当然の

ことながらフィールドワークが不可欠であり、また歴史的な経緯を明らかにするうえで、民俗学の研究成果も欠かすことができない。

さらに現代の日本は、産科医療が目覚ましい進展を遂げ、「病院で出産するのが当たり前」と考えられるようになったにもかかわらず、現実には出産する病院や診療所を自由に選ぶのが難しい矛盾に満ちた時代にある。筆者はそれを「第三次お産革命」の時代と名付け、出産や胎児に対する意識もまた、時代に応じて大きく変化してきたことを指摘した（安井眞奈美『出産環境の民俗学——〈第三次お産革命〉にむけて』昭和堂、二〇一三）。「第三次お産革命」は、明治以降二度にわたって出産のあり方が革命的に変化したとする藤田真一の『お産革命』（朝日新聞社、一九七九）を受けたものである。

命の誕生の現場で起きているさまざまな変化を、医療従事者と、産む女性やその家族たちだけが考えるべき課題とせず、広く生命倫理の視点からも議論していけるよう、まずは現在の変化や動きについて観察と記録を続けながら、筆者自身、この分野の研究に寄与していきたいと思う。

謝辞 本稿執筆にあたり、文献について御教示いただいた中野紀和さん、丸山泰明さんに御礼申し上げます。